

貧しき母親の場合

牧 賢 一

本文は英國エステル・シルヴェリア、パンカースト女史の“Save The Mothers”の一節を紹介したものである。貧しき母の妊娠中の保護に就て社會の注意を喚起せんとする女史の熱烈なる主張は、此の簡單なる抄譯によつては到底傳へられないが、母と子との問題の最基本的な一重要面として考へさせられることが多い。

勞働階級の母親は一度妊娠をするに其の負はされる苦しい重荷にすつかり參つて了ふのである。彼女の成長して行く荷物の重量は重く彼女にかゝつて到底支へ切れないばかりになる。一週は一週ミ、段々彼女は毎日の仕事に堪へるこゝが苦しくなつて来る。脊中は曲り、脚は腫れ、腰は焼けつくばかりに痛む。死なんばかりに苦しい嘔吐、氣も狂ふかと思ふ程の頭痛。而かも未だ彼女には休息が許されないのである。家の中の一切を一人でしなければならぬ。萬一彼女が餘りの疲勞に家事の世話を休みでもしたらば、其の結果は數限りない汚れものがたまり翌日は更

に仕事が出積されることになる。

可愛い子供達が學校に行く、キチンこした身なりをさせてやらなければならぬ。直ぐに汚して来る彼等の着物の洗濯は全く彼女の精根を盡くさせる。漸く子供達が寢床の中に優しい寢息を立てる頃には、彼等の靴下にあいた大きな穴をかがり明日の衣服の繕ひをして置かなければならぬ。夜中になるともう彼女は其の疲れ氣分の悪いために寢付くこゝさへ出来なくなる。息切れがして動悸は劇しくなり、腿は痙攣を越し、足腰の節々は灼熱して齒までが痛んで来る。屑綿をつめた敷布團はゴック／＼塊まり、古

いベッドの緩んだスプリングはギシ／＼と軋しむ。彼女は明日早く働きに出なければならぬ。夫の目を醒ますことを心配しながらそつと抜け出して椅子の所まで葡つて行く。こうして座つたまゝ夜明け方になつてウト／＼と微睡ろむ頃にはもう子供達が起き始める。一番下のやつと乳離した子供が彼女に抱かれやうとわめき立てる。そうこうするうちには夫が仕事に出かけるために起きて来る。

それ程貧乏のひきくない家庭でも少額所得階級の収入では日常生活に必要なものでさへも常に犠牲にされなければならぬ。母親は自分の夫のために、子供達のために、凡ゆる點に於いて習慣的に自分を否定してゐる。毎朝早くから劇しい仕事をしながらよく朝御飯を抜きにする癖を作つて了ふ。又其の他の食事の時でも小さい子供達に食べさせたり、お給仕をしたり、遅い家族を待つたりして時を失つて了ふことがよくある。自己を無視し否定する此の母親の習慣は妊娠やお産の時にも破ることが出来ない。子供達の喧さい世話、それは時に悪いことだとは知りつゝもお腹の子供まで慾しくないと考へさせることさへある。自

分のこと等かまつてゐる暇も餘裕もない。少しでもお金のかゝるやうな何か特別なことを自分のためにすることは、非常に悪い利己的なことだとしか考へられない。貧乏がひどい時には毎も自分はお腹をすかせて子供達を稼ぎ手である夫のために少しでも餘分にパンを食べさせる。そして自分は僅かばかりの肩パンをかじるだけだ。「相棒！」と夫は彼女を稱ぶが、眞に彼女は家庭のひきい重荷の下にあつて支へる鐵の相棒ではある。

二人分の榮養を必要とする母親が一人分の榮養すら得られないでゐると言ふことは何と云ふ怖ろしい悲しむべき事實であらう。私は今、過ぎし昔あの煤煙の立ちこめたマンチエスターでの或る寒い薄暗い朝の光景が幻しのやうに思ひ浮ぶ——私は學校へ行くのでオクスフォード街を歩いてゐる、シヨールをかけて大きなお腹をしながら痩せ細つてやつれた一人の女、其の女が路ばたの一軒の肉屋の店頭から全く肉片もついてゐない一本の骨を取らうと細い手を伸ばす、立派な身なりをした二人の紳士——一人は

山高帽をかぶつてゐる一が馳け出して私を追ひ越した。思ふに其の肉屋から五六歩の所で彼女を捕へた。其の女が彼等の方に向けた顔は蒼白にやつれ果てた悲しみ其のもの顔である、肉屋の主人が走つて来る、群集が取り圍む、そして遂に警官が来た。私の膝頭はガタ／＼と震へ、心臓はドキ／＼と今にも息が止まるかと思ふばかりに浪打つてゐた。私は此の時、自分が弱く小娘に過ぎないことを口惜しがりながら路ばたの壁に危ふく身を支へて悶へたのであつた。

それから何年か後のことであつた。イースト・ロンドンのオールド・フォード街にある或る肉屋の店に私達の婦選のパンフレットを其處に集つてゐる人達に配り度いと思つて這入つて行つた。こゝがあつた。するに硝子のかけ落ちた窓の外の暗がり一人の女がゐる。ガス燈の煙かけがボンヤリと彼女の上にかゝつてゐた。其の女は邊りを見廻はしながらやにはに幾切れかの肉片を攫つた。其れを見た肉屋の亭主は大聲に怒鳴りながら飛びかゝつて彼女の手首をつかまへた。然し其の次の瞬間彼は彼女が身持の女であ

ることを見た。するに彼はあわてゝ手を放した。そして「それを持つてお行き、お神さん、一寸もお前さんが悪いんぢやあないんだよ」と言つた。然し其の女は肉片を置いたまゝいそいで逃げ出した。そうするに肉屋はもう一度大きな聲で「一寸お待ち！こいつを持つて行くんだよ」と叫んだ。彼の優しい親切に人々は彼女を連れ戻して前に押し出した。亭主は更に肉切臺から大きな肉の塊を切り取つて「此の方がいゝよ」と云つて彼女に無理に持たせた。彼女は此の飾らない親切な贈り物に涙を流して幾度も幾度も頭を下けながら再び暗がりの中に消えて行つた。

「はらみ女が懸命に働いてゐるのを見ることは世にも最も美しい光景である」と云ふ舊い道徳が未だに人々の頭を支配してゐる。或る一人の若い方面委員が、「妊婦相談所に於ける警務官は妊婦が愈々分婉だと言ふ時まで家事を禁ずる権限を持ち得ないか」と言ふことに付いて其の友人達に相談したが誰も皆そんな必要はないと一笑に付してしまつた。こゝろが其の數日後其の中の一人の家庭を訪ね

た時に、三週間後に第二世を分娩する筈になつてゐた其の細君は此の時既に床の中に入つて絶対に動くこゝが出来ないやうな體になつてゐた。足がひきく腫れてしまつたのであるが、之こそ何よりの啓示だこゝはなくて何であらう。

或るバラック住宅の四階に、何とも云ひようのない苦しい様な様子をした一人の女がゐた。彼女の眼はドンヨリと生氣がなく、髪の毛は幾日も手入れをしないで見えて鳥の巢のようで、着物はボロ／＼のひきいものをつけてゐる。それは、此の女にも曾つては飛んだり跳ねたりした若い娘時代があつたのかと思はれる位である。彼女はもう數日後には身二つになる體であるが、足は怖しく腫れ上つてきて一時も立つてはゐられない位である。それでも彼女にはしなければならぬ澤山の仕事があつた。彼女は椅子にまたがつて夫れを杖にしてやつこ室の中を動きながら、子供達に着物を着せてやつたり、ベッドの仕度をしたり、汚れた食器を洗つたり、又其の不自由な體をやつこか、めながら小

さな子供達が下にこぼした食事の屑を拾つたりするのである。遂に彼女は苦しくて我慢が出来なくなつて一寸の間暇を見て横になつた。然しやつこ足の痛みが少し納まりかけて来た時には又起きなければならなかつた、子供達が三時のお菓子を貰ひに来たからである。其の時ほんの一瞬間ではあつたが流石の彼女も思はず氣持の悪い顔をした。然し次の瞬間にはもう彼女は一番喧さい下の子供をしつかり腕に抱きしめて接吻をしながら、まるで自分が一寸でも氣嫌の悪い顔をしたこゝを悔いてゐるかのようにな一生懸命にあやしてゐた。それでも又彼女の足は痛み始めた。彼女は其の兩足を重ねて感覺をまぎらそうこ全身の重みで押へつけながらバンにマルガリン(人造バター)をぬつてやるのであつた。此の陰惨な二部屋に住居はロンドン市會によつて建てられた「模範住宅」なのである。水道栓は數家族の共用で戸外にある。石炭入の引出函は居間の中にあるし、而かも其の直ぐ上は小穴をあけたトタン張の戸がはまつた食器戸棚である。石炭の埃りはかまはず其の穴から中に入つて食物にかゝる。室内にある一切のものは、彼女

がそれによつて數年來家族を養つてゐるミシンを除いては、皆此の上なく貧弱な古ぼけたものばかりである。

貧しい母親達にまつて其の妊娠の後期に於いて過重な家事から放免されることはみんなに有難いことであるが知れない。然し多くの母親達は其の前日までの劇しい勞働に流産や逆か産等を起すのである。彼女達は其の産室すら自分で仕度しなければならぬ。而かも彼女達は出来るだけ最もよく其の産室を装ふために心を配る。彼女は更其の働けない間他人の世話になることを考へて、豫め家中の大掃除をすらするのである。時に彼女は高い梁の上やカーテンの塵りを拂ふために大きなお腹を扱ひかねながらテーブルや箱の上によつたりする。

斯の勞働にそれに伴ふ虚弱の苦しきの上に、更に母親は其の家族の多い、慰めを憩ひの家としての要素を缺いた、平和のない、狭い貧しい住居の持つ色々な缺陷によつて害はれてゐる子供達を保護し世話をしやるために心を悩まさなければならぬ。もう分娩ミシン云ふ陣痛の最中に、小

さい子供が、自分の親しい母親の物々しい變つた様子や知らない他所の小母さん達のゐるのに脅えて何とも言ふことの出来ない淋しさに、唯一人母親のベッドの下にかくれながら、ひもじさ悲しさに泣き疲れて遂に寢込んでしまつてゐるの等を見付ける時の母親の氣持は如何であらう。苦しい體を動かして起してやるミシン又泣きじやくつてゐる其の姿に彼女も亦泣くのである。又、母親のお産の間長い時間狭い家の中に入つてはいけないミシンはれた子供達が、寒い冬の暮れ方なまも御飯の時間もミツくに過ぎてゐるのに入口の石段に肩を寄せ合つて、家の中から聞えて來る母親の無氣味な呻き聲を聞きながら不安を悲しきの中に座つてゐる有様は貧しい人達のゐる街に見る毎もの光景である。又時にはお産が長びいたために放つて置かれた小さい子供が寒さに熱を出すことさへある。

私の知つてゐる幾多の貧しい家庭についての知識は、母親の産褥中に起る幼児の致命的な病氣が多く此の分娩中に起因するものであることを統計的に示し得る確信を

私に與へる。やがて母親がさうにか自分で起き上れるやうになるに、今度は彼女が産褥中に病氣になつた子供の看病に云ふ大きな仕事待つてゐる。其の上に新しく生まれた赤坊にお乳をやらなければならず、又彼女が寢てゐた間放つて置かれた總ての家事を片付けて行かなければならぬ。斯くて、分娩後十日の間、日に一度或は高々二回訪ねてくれる産婆の世話になるにしても、或は醫者や家政婦の手を借りるにしても、彼女達が受けられる手當に云ふものは到底充分なものではあり得ないのである。それは有福な家庭の婦人達が、かゝりつけの醫者、熟練した産婆、看護婦から受ける完全な手當に較べるならばまるで問題にはならない。産婆の來てくれる十日の間さへ、此の貧しい労働階級の母親達は其の家事から全く自由にされることはない。小さい子供達は彼女のベッドの廻りで泣いたり騒いだりするし又慰めの腕に抱かれないとわめく、さうかと思ふに今度は、大きな子供達が、ブディングを混ぜてくれぬ鉢を持つて來るし、赤坊のナブキンや去年生れた末の子のズボン下を洗つてくれぬ水石鹼の入つた盥を持つて

來る。さうしてゐるうちに今度は大變な叫喚が起る。大人の洗ふ着物を自分で洗はうとしてお湯をこぼして湯傷したに云ふ騒ぎである。例へ近所の人や親戚の手傳ひが來たにしても、依然として澤山の仕事が寢てゐる母親に子供達にかゝつて來る。そして多く母親は十日の安靜も守らずに働き出して丁ふ。

「突然御手紙差上げる失禮を御許し下さいまし。私は唯今自分でも如何してよいか分らない苦しみの中に居るもので御座います。何から申上げませう。私の此の不幸の始まりは、えゝ、そうです、一九一四年の八月六日の日です。それは私の夫があゝの戦争に出征してしまつたところから始まつたのです。私は其の十三日に子供を生みました。六人の子供を抱へながら私は直ぐにも食べるために歩き廻らなければなりません。其のために遂に私は八週間の長い間床につかなければならぬことになりました。それ以來私は足を悪くしてしまつたのです。醫者は申しますすつかり直るまで養生をしないならば私は一生廢人にな

つてしまふだらう。考へても御覽なさいませ。私は未だやつと三十八でございます。それなのに此の年で私の小さい子供達の面倒を見るこゝが出来なくなつてしまふなんて、御分り下さいますと思ひますが、私は子供達に着物を着せてやらなければなりません。靴下や下着の繕ひもしてやらなければなりません。未だ色々のこゝをしてやらなければならぬのです。私は決して有閑婦人ではございません。若しも先生が、私がもう暫らく私の悪い足を休めてゐるこゝが出来ますやう御援け下さるこゝが出来ますならば、私はやがてすつかり治つて皆のために働くこゝが出来来るやうにならうと思ひます。唯今は、私は私自身にこゝても私の夫にこゝても――彼は今は家に居ります――惨めな存在です。――之が私には相應しい運命なのかも知れませんが、若し私がそうやつて養生をするこゝが皆のためにならないと思ひます。先生、さうぞ、私がもう一度體の快くなるこゝが出来ますやうに――此の一人の惨めな母親のために、先生の御出来になりますだけの御援けを下さい……」

之は會つて一人の母親から私に寄こした手紙である。

然し遂に、極めて徐々にはあるが、産褥中に於ける家政の援助、云ふ最も根本的な重要問題が社會意識の上に醒めて來つゝある。二三の縣では、一定の區域の最も貧窮な家庭に限つて無料で其の家事と子供達の世話をする「家政婦」を派遣するこゝになつた。指定以外の區域の家庭に於いて必要な場合は其の収入に應じて些少の金を支拂はなければならぬ。然し、斯くの如き手傳ひが與へられてもそれは極めて短い期間である。此の家政婦の派遣期間は如何なる場合にも十四日を越えるこゝは出来ない。方面委員や役人達は、一般に産婦には此の期間の援助で充分である。母親達は決して之以上の長期間の手傳ひを望んでゐない、家庭外の人がある云ふこゝは結局反つて氣を使ふこゝになる、だから彼女等は早く普通習慣通りの生活に歸つた方がいゝのだ、云ふも主張する。たしかに或る場合に於いては之は事實である。他人がある言ふこゝは經濟のやりくりをするこゝを妨げるし、而かも經費の節約云云

でなければならぬ。

母親はまことに偉大なる神祕である。此の事實を知り得ないものは人生の本質を見るここの出来ないものである。

(六二頁よりつゞき)

然に接する事の出来ない幼児達はせめても想像の中に秋の森、秋の山に遊びに行き得た事を私どもは思つて喜しく見送ります。

龍宮城ゆき鳥の國ゆきは又次に書かせていただきます。

以上は相談いたしましたから當日まで一週間を要しますがかなり忙しい思ひを幼児と共にいたします。二十七人の者が五十人以上のお客様を迎へるので、御座いますから。しかし子供達は緊張した楽しい様子です。ごします。一つの目的の爲に、組全體が活躍する云ふ事の爲にも一日を面白く遊ぶ云ふ事からも、良い遊びではないかしら考へて居りますがどうぞ御批評下さいませ。

ふここは此の際最も必要なここののであるから。それにしても、女醫ですらもが、勞働階級の婦人が産褥で寝てゐる期間が長すぎる、と言ふ驚くべき意見に賛成する者が多いのである。彼女達も有福な婦人達は決して異なる人種ではない。たしかに彼女達は其の貧弱なる健康状態にも拘らず、習慣も、そして迫られる必要もから、其のひさい仕事の重積を辛うじて脊負ひ耐へてゐるけれど、然しそれは女醫先生の平常時の體力の最大限以上の努力も精力もを費してゐるのである。

ひさい貧乏も惱みの底にある家庭の中でも、母親も赤坊の樂しげな微笑を見るここの心は明るく躍る。まここに母親の苦しきは深く絶える間もないであらう。そして又來る次の妊娠のくびきに苦しむここを思へば怖れ戦くここではあらう。然し母親もなるここの中に其の子供に對する限りなき愛情が成長して行く。それ故に、總ての母親もつて、最も貧しい最も重い重荷を負つた母親にもつても、嬰兒の死、死産も云ふここは最も悲しき損失、永遠の悔恨